「葛城」を詠んだ万葉の歌

2020.11.　太田蓉子

奈良県御所市は、葛城・金剛山地の東の麓に位置し、山々を直ぐ近くに望む土地です。古代律令制では、「大和国・葛上郡（かづらきのかみのこほり）」と呼ばれていました。また当時から、古い神社が極めて多い地域でした。（国の祭祀に係わる式内社が14社）其の筈、遡さかのぼれば４世紀末～5世紀、ここは、ヤマト政権形成の初期に中枢にいて活躍した豪族・葛城氏の本拠地でありました。

（更に古い時代のことであるが、「日本書紀」によると、2代・綏靖天皇、5代・孝昭天皇、6代・孝安天皇の時代は、この地に宮を設けていた、つまり、ここは都であったと言う。）

万葉集に、「葛城（葛木）かづらき」が詠まれている歌は、5首あります。

「葛城の山」を詠んだ４首（内一首は中腹の高間）の中で、よく知られている歌は、巻十一「古今相聞往来歌類」古の部、「寄物陳思」・「雲に寄せる」

「柿本人麻呂歌集」にある歌です。

「　春柳はるやなぎ　葛城山かづらきやまに　立つ雲の

（春楊）　　（葛山）　　（発雲）

立ちても居ぃても　妹をしぞ思ふ　」　（2453番）

（立座）　　（妹念）

（　）内は、原文の文字

略体歌：活用語尾、助詞、助動詞の表記を省略

（葛城の山に立つ雲のように、立っていても座っていてもあの娘のことばかり考えてしまう。）

このように、歌の趣意は単純なものですが、その中に、次のような意味が込められています。

“春の柳の蔓つるで作る鬘かづら（髪飾り）、その葛かづらと同じ名を持つ葛城山”（枕詞）

“その山に、雲が立っては去り、また居座ったりしているが、私も“（ここまでが序詞）

との意味です。

“柳が芽を吹く或る春の日、若緑の葛城の山に、ぽっかりと浮かんだ雲の動きに、ふと目を止めて”　詠んだのであろうと、感じさせるのです。

この歌を、後の人が真似たと思われる歌がありますが、

（巻十「秋相聞」　山に寄す　作者不明　2294番）

「秋されば　雁飛び越ゆる　龍田たつた山　　立ちても居ても　君をしぞ思ふ」

（秋去者）（雁飛越）　　（龍田山）　　（立而毛　居而毛）　（君乎思曽　念）

この歌では、上の句・序詞の効果が、下句の趣意に巧く作用していないと感じます。
“秋になると雁の群れは、龍田山を越えて一斉に飛び去って行く”のですから。

（僅かな文字数の漢字の訓で、歌を表す書き方、「柿本人麻呂歌集」における略体歌は、恋の歌に見られ、類型的と言われる。人麻呂自身の作とは言えないが、類型性に依拠しつつも彼独自の新しい歌の形を目指していた若い頃の歌群とも言われる。
見聞きした歌の中で、面白いと思った歌を速記して残していたメモを基に、作歌したものかと思われます。）
なお、「立ちても居ても（君を思ふ）」と詠む歌は、他にも幾つかの例があります。
（巻四・568 番、巻十二・2887 番、3089 番など）
この文句は、当時、“求愛の常套句”であったのかと思います。

次の一首は、「葛城の地の歴史」を想わせるものです。

巻十一「古今相聞往来歌類」（思いを伝え合う）今の部、「寄物陳思・人事部」に載る歌。
「　葛城（葛木）の　襲津彦そつひこ真弓まゆみ　荒木あらきにも

頼めや　君が　我が名　告のりけむ　」（2639番）
歌の意味は、
上の句：あの葛城の襲津彦が使ったと言う荒木の強弓のように、（強弓の荒木のように）
（荒木は、加工していない木材。弓を作る木、荒木で作った弓の意味も。）
下の句：1、頼もしい人だと思っているその貴方が、私の名を呼んで正式に求婚してくださったのですね。（男が女に名を問い、名を呼ぶことは、求婚を意味する。）

2、貴方を頼もしい人だと思っていたのに、どうして私の名前を人に告げたりしたのでしょうか。（男女が交際中は、女の名前を人に告げてはいけない。噂が立つと、親などの妨害者が現れ、男は女の所へ通えなくなる。）
3、貴方は私を頼もしく思っておいでなので、名前を人に告げたのですね。
（私が二人の関係を周囲の者に認めさせると確信してのことですね。）
下の句は、これら3通りが、考えられます。
作者は不明ですが、歌を詠んでいるのは女性と見えます。この女性または相手の男性の身分や立場が分かれば、いずれの意味で下の句を発しているのか、判断し易いのですが。手掛かりは、女性が葛城襲津彦の名を知っていて、引き合いに出していることです。
万葉時代の宮廷では、神功皇后、応神天皇、仁徳天皇のもとで新羅や百済との外交を担った武将・葛城襲津彦のことは、伝説的物語として語られていたようです。この人の娘である磐之媛（仁徳天皇の皇后）のことは、「相聞歌」（巻二・冒頭）が作られて、宮廷で歌われています。（拙著「万葉集における仁徳皇后の歌」参照）

宮廷に仕える女性が、襲津彦の名を知って詠んだとも考えられます。とすると、宮廷で知り合った身分の高い男性に求婚された、そのことを喜び誇らしく思って詠んだ。つまり 1、の解釈が妥当と言えます。
一方で、葛上郡に住んでいる、又はこの地出身の女性が詠んだとも考えられます。
葛城山麓の高台、御所市森脇は、磐之媛が育った宮(高岡宮、綏靖天皇宮も)があったと伝わる所です。(ここから南一帯の南郷遺跡群には、弥生時代から古墳時代の遺跡が多数あり、その内5世紀前半の極楽寺ヒビキ遺跡には、祭祀用と見られる大型建物跡も出土。

襲津彦の墓と見られる宮山古墳・全長 238m も近くにある。)

この地では、土地の大神・一言主神(一事主神・ひとことぬしのかみ)が、"葛城の山に坐いまして、民を見守る神"として大昔から崇められ、豪族・葛城氏が手厚く祀る神であったと見られています。その葛城氏の本家は、襲津彦の孫の代に(5 世紀後期)、雄略天皇によって滅ぼされたと言われます。しかし、葛城坐います一言主神は滅びず、この地の守り神として祀られて来たと見られ、やがて、万葉の時代(律令制の始まり)には、朝廷から幣帛へいはくが奉じられるようになったと思われます。 この神は、今も、この地の一言主神社(注)に鎮座しています。

(天武天皇は、ここの長柄の杜もりで、後に言う流鏑馬やぶさめを行わせている。)

当時、土地の人は皆、この神と共に、葛城一族とその始祖・襲津彦の話を伝え聞いていたと考えられます。
歌は、この地に生まれ育った女性が詠んでいると見ると、下の句は、2、または 3、の解釈が妥当と言えます。(相手の男性が、年下か気弱な若者であったとすれば、3、か。)
もっとも、この歌の真の詠み手は、この歌を書き表わした作者に他なりません。
歌は、「古今相聞往来歌類」(作者不明歌)今の部、の歌に特徴的な詠歌形式の一つと言えるもので、"或る一組の男女を想定し、その何方か(ここでは女)に、相手への思いを語らせる形"をとっていると思います。
ここで作者は、当世の男女間の風習を歌にする中に、わざわざ葛城の伝説的歴史上の人物を登場させます。"ここから二人の関係を如何様にも想像して下さい"そして"かって栄えた此の地を思い出して欲しい"と訴えている、と気づかされるのです。

主な参考文献　・伊藤博 「萬葉集・釋注」 集英社
・宇治谷孟「日本書紀」全現代語訳　講談社学術文庫
・水谷千秋「古代豪族と大王の謎」 宝島社新書
・橿原考古学研究所附属博物館「大和の遺跡」 ・橿原考古学研究所・友史会「葛城氏の本拠地を歩く」(2011 年 7 月)

注、 葛城一言主神社(「延喜式神名帳」に載る・式内大社・名神大社)

神社は、雄略天皇が葛城山中で狩猟をしていた時、天皇一行と全く同じ姿の一言主神の一行が現れ、“悪事も善事も一言で言い放つ神”と名告り、天皇と狩猟を競ったと言う(「古事記」では、天皇は恐れ入って弓矢を捧げた。「日本書紀」では、ともに狩りを楽しんだとある。) その場所がここだ、と言います。（後世、雄略天皇をも祀るようになる。）

神社は、本殿の傍に、「葛城の襲津彦」を詠んだ万葉歌の歌碑を建てています。

この碑では、歌の説明は、本文 2、の解釈をしています。 （2020年10月 撮影）

坂本、村田「万葉の旅」大和編（小学館）における葛城の地図より、一部削除し、付け加えたもの